

氏名（本籍）	くろだ だいすけ 黒田大祐（京都府）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 102 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 22 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 35 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	橋本平八と石について — 《石に就て》制作の過程とその背景の考察—
論文審査委員	主 査 教 授 伊 東 敏 光 副 査 准教授 加治屋 健 司 副 査 教 授 関 村 誠 副 査 准教授 城 市 真 理 子

論文内容の要旨

本論の目的は、大正末期から昭和初期にかけて日本美術院展を中心に活躍した彫刻家、橋本平八（1897－1935）の生涯と作品を考察しながら、代表作である《石に就て》の制作の過程とその背景を明らかにすることにある。

第一章では、平八の生涯を考察した。第一節では、生い立ち、佐藤朝山への弟子入り、そして日本美術院研究所での研鑽を取り上げ、平八が受けた指導及び身につけた彫刻の技術を検討し、平八の生涯にわたる制作の基本姿勢を論じた。第二節では、前衛詩人の実弟である北園克衛（橋本健吉）との兄弟関係に焦点を当て、健吉の平八作品への具体的影響や、平八の著書『純粹彫刻論』の出版および平八像の受容への影響を論じた。さらに、故郷の朝熊での制作状況を調査し、平八の人物像を考察した。もっぱら円空やアニミズムあるいは木彫の文脈で論じられて「異色」と評されてきた平八像を見直し、平八が、広く知識を得て「彫刻とは何か」という問いを一貫して考えていたことを明らかにした。

第二章では、《石に就て》を他の彫刻作品との関係で論じた。作品分析を通して、その技術的背景を考察しつつ、関連資料の分析や生家周辺の実地調査に基づいて、思想的背景を考察した。第一節では、平八の日記等の記述を分析して、《猫B》、《裸形少年像》、《石に就て》、《花園に遊ぶ天女》の技術的な繋がりと具体的な制作技術を論じた。とりわけ、《猫B》の「自然からの造形的発見」や、《裸形少年像》の表面の制作技

術が《石に就て》に繋がったことを明らかにした。第二節では、《石に就て》の制作の背景として、故郷朝熊の生活環境で培われた平八の科学的思考や、《石に就て》以前の石の研究、さらには平八の円空作品への技術的共感を論じ、平八が高い教養を身につけ、論理的思考によって制作の技法や題材を選択していたことを明らかにした。

第三章では、《石に就て》の制作の方法と意図を考察し、平八独特の概念と後期石系作品の展開を論じた。第一節では、《石に就て》の原石の選択の経緯を検討し、平八が石に彫刻性を見出していたことを明らかにした。木取りなど、《石に就て》の具体的な制作方法を調査し、その選択と技術の意図と効果を考察した。第二節では、平八が《石に就て》に関して記した「仙」の概念を中心に論じた。関連資料の分析を通して、「仙」を、「人間の知覚を超えて物理的に動いている自然の力」と平八独自の解釈の加えられたものと捉え、それを表現したのものとして《石に就て》を論じた。また、実地調査に基づいて、これまで行方が判らなかつた後期石系作品の原石を明らかにしたうえで、《石に就て》以後の作品の変化について論じた。

本論文は、平八の生涯、関係する作品の技術的な繋がりや制作の背景、および《石に就て》の制作方法と意図を考察することを通して、平八が、論理的・合理的な思考に基づき、《石に就て》によって、人間の知覚を超えた自然の力を表現しようとしたことを明らかにした。本論文は、平八や日本近代彫刻史に関する先行研究に加えて、三重県立美術館寄託の平八の日記や書簡等の一次資料の読解、および遺族などの関係者への聞き取り調査に基づいている。これらの調査を通じて、平八生前の生家の庭の様子を明らかにし、さらに、これまで所在が分からなかつた《兎》など後期石系作品の原石も発見した。本研究は、《石に就て》制作の過程とその背景を明らかにすることで、今後の平八研究、さらには日本の近代彫刻研究に寄与することを目指した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、大正末期から昭和初期にかけて活躍した彫刻家の橋本平八の彫刻作品《石に就て》の制作過程とその背景を考察したものである。

第1章は、平八の生涯を、その主な局面に焦点を当てて論じている。平八の生い立ち、佐藤朝山への師事、弟の北園克衛との関係、故郷である朝熊での生活を考察して、平八の脱神話化を試み、平八が「彫刻とは何か」という問いを一貫して考えていたことを明らかにしている。

第2章は、《石に就て》を、平八の他の彫刻作品との関係で論じている。《猫B》の「自然からの造形的発見」や、《裸形少年像》の表面の技術が《石に就て》に繋がったと考察している。写実的な制作に行き詰まるが、円空の作品と出会って再び石に取り組み、後期石系作品を制作したと述べている。

《石に就て》を論じた第3章では、木取りなどの具体的な制作方法を明らかにした上で、平八が自然の造形力をそのまま彫刻に取り入れようとしたと述べる。平八が《石に就て》に関して記した「仙」を、「人間の知覚を超えて物理的に動いている自然の力」と捉えて、それを表現したものと論じている。

本論文は、先行研究を十分に踏まえた上で、遺族への聴き取り調査や、未刊行資料の調査も行って書かれたものであり、後期石系作品、自宅の庭、仙の概念に関して、新たな事実や解釈を提示している点で高く評価できる。

以上のことから、本申請において合格とした。